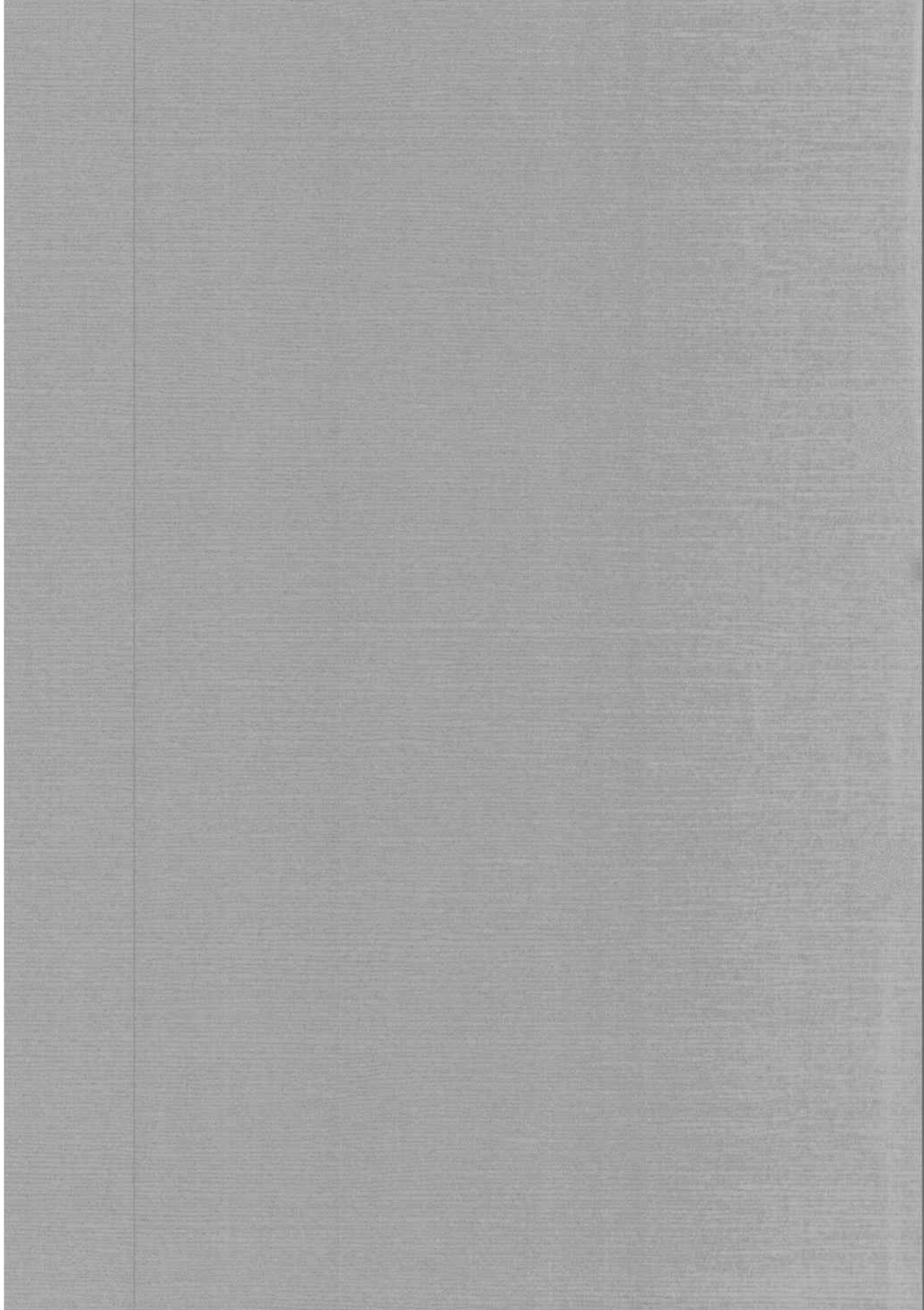


紀 要

第 10 号

茅野市八ヶ岳総合博物館



はじめに

茅野市八ヶ岳総合博物館は、設置以来13年経過したが、この間市民の生涯学習のひとつの拠点として郷土の自然・歴史・民俗・産業・文芸の情報センターとしての役割を果たしてきました。しかし、当館はここ数年市民の来館者の減少が目立っています。郷土の博物館として市民が楽しみながら自ら学ぶ場となっているか、設置の原点に立ち返って見直しが迫られています。現在当市に於いてあらゆる面で進めているパートナーシップ（公民協働）の活動の場として、日常的に気軽に訪れてもらえるような博物館を考えています。

そこで、活性化の一方策として、やや停滞気味である博物館ボランティア活動を見直し活性化をできないか模索してきました。既に活動を展開している民話グループ（地域に伝わる話や昔の生活を掘り起こし収録編集し冊子〈山浦の語りべ〉を残している）、北部中学校に併設されている北部生涯学習センターの天体ドームで、星座観望を続けている天文友の会の他に、次のようなボランティアを立ち上げました。自然（身近な場所の小動物のカエル、ホタル、野鳥など、自然は今どうなっているのか）、はたおり（裂織り）、樹木・野草（敷地内の植物の観察・名札付け）、歴史・民俗（農業用水を拓いた坂本養川）、科学おもちゃ・ものづくり（ロビー体験）など常設展示に関わる多分野に活動を広げました。この活動を何としても盛り上げて行かなくてはと試行錯誤しているところです。

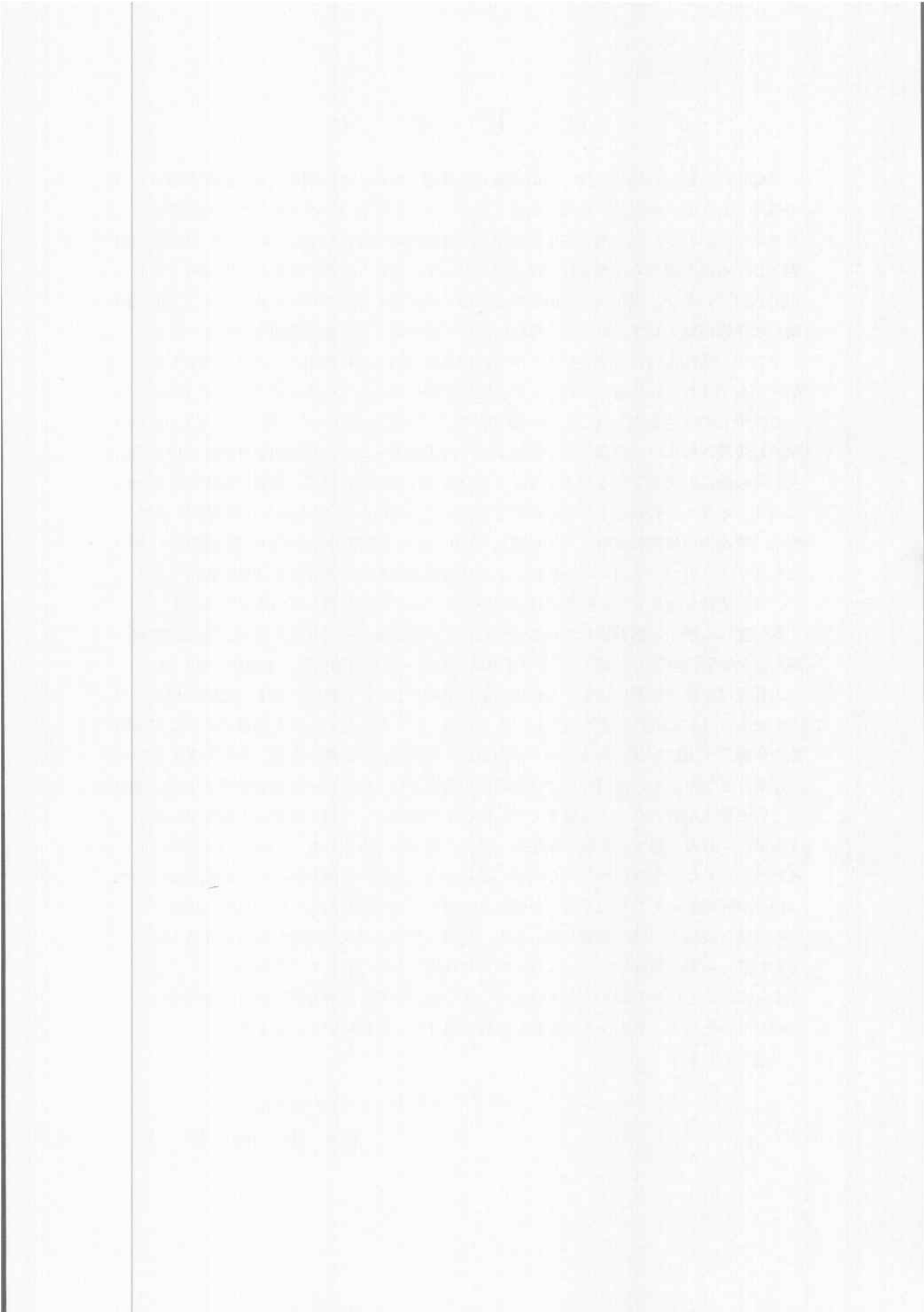
本年度は本冊子に掲載されているように多くの事業を行ってきましたが、文芸館開館一周年記念特別企画展として、「アララギ派農民歌人―篠原志都児展」を開催しました。

志都児は家業の農業に従事しながら作歌に励みましたが、最愛の妻との死別、相次いで家族を失うなど家庭的に恵まれない一生でした。しかし、そのような境遇にありながら和歌を伊藤左千夫に学び、島木赤彦・平福百穂・斎藤茂吉・同郷の友等、多くの歌人との交友がありました。この山国の地にまだ鉄道が開通されていなかった明治時代に中央で活躍していた歌人が訪れたことは驚きです。病により38歳という短い生涯の志都児でしたが、よき師、よき友を得て、作歌に傾注し、優れた作品を生み出したことは、いま岳麓に生きるわたしたちに、生涯学習のあり方や心の豊かさとは何かを語りかけてくれるものでした。この企画展開催にあたり志都児のお孫さんにあたる篠原圓平先生には、生家に所蔵されている貴重な資料を、快くお貸し願いまた、岳麓に花開いた文芸の流れをわかり易く解説してくださいました北澤敏郎先生（ヒムロ主宰）には展示全般にわたりご指導いただくことができました。ここに厚く御礼申し上げます。この冊子を通して博物館の目指す方向や内容を理解していただき、絶大なるご支援ご指導を賜りたくお願い申し上げます。

平成14年3月

茅野市八ヶ岳総合博物館

館長 小池 春夫



目 次

- ・書簡に見る志都児参加の歌会について 小堀 幸恵 (1)
- ・博物館活用指定学級（遊学教室）について 正木 美香 (11)
- ・天体観測室を利用したの活動 大谷 勝己 (13)

年 報

- ・平成13年度事業報告 (19)
- ・常設展示内容の概要 (23)
- ・博物館協議会委員・専門委員名簿 (25)
- ・博物館 職員名簿 (26)

書簡に見る志都児参加の歌会について

小堀幸恵*

はじめに

八ヶ岳麓文芸館は平成十二年十月、茅野市八ヶ岳総合博物館に設置され満一周年を迎えた。この一周年を記念し、当文芸館では八ヶ岳麓で生まれ、活躍した人物にスポットをあて、企画展を開催するという事で、北山の湯川に生きた農民歌人、篠原志都児について、その生涯と交友と題し、企画展を行った。それに際しては篠原志都児の孫にあたる篠原圓平氏に多大なる協力をいただき、多くの歌人達との交友を物語る書簡や写真、その他多くの資料提供をいただいたことで、非常に充実した企画展を行うことができた。私も企画展にあたり、その助けとなればと思ひ、資料や書籍などを調べる機会を得たが、今回はその中から歌会の様子について、主に書簡資料からその流れと様子について、自分なりの考察を加えながら追っていきたい。

1. 明治三十六年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は一回。同年五月十一日付の葉書にある。差出人は岩本木外（木外）久保田俊彦（赤彦）からであり、宛所も両角国五郎（竹舟郎）両角福松（福）篠原円太（志都児）となっている。その内容は次のようなことが書かれている。

拜呈來らん十六日午後三時より永明村矢ヶ崎こくやに於て同人數輩相會し短歌相會催す可く候間目下御多忙中とわ存し候へ共御差繰り御來席被下度猶落合平野等より來會者も下有之筈に付き添いて申上候也

もし御不都合ならば御手数乍ら御報被下度候也

この時期志都児は『比牟呂』第二号に“千洲”の雅号をもつて俳句三句、短歌一首を初めて発表し、また『心の華』にも二月号から十月号にわたり十八首が掲載されており、歌人としての志都児が確立しつつあると考えられる。また宛所を見ると、志都児個人宛てではなく北山歌人宛てとなっている。このことにより志都児が北山歌人とし認知されていたこともわかる。尚この歌会の内容については書簡を追った上では不明であり、出席についても書簡で述べられた資料は見当たらない。

*八ヶ岳総合博物館職員

2. 明治三十七年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は一回。同年十一月二十六日に、志都児の歌の師である伊藤左千夫を迎え、布半（諏訪）で行われた歌会についてである。この年二月九日、志都児は日露戦役に、近衛師団補助輜重輸卒として満州に出兵している。

このとき左千夫や赤彦から征露の歌や九連城の戦についての歌が送られている。しかし志都児はわずか四ヶ月で胃と頭の病により六月八日、安東兵站病院に収容され、七月には広島の予備

病院に転院し、八月には東京麹町の陸軍予備病院に収容されている。このとき、同病院に左千夫が見舞いに訪れており、その感激を両親へしたためた封書に見ることができる。その後脚氣との病名のもと召集解除となってしまう。しかし出征時、盛大に送り出された志都児はなかなか帰郷しがたく、左千夫をたより、十六日間左千夫宅に滞在した後、故郷湯川へ帰郷している。

またこの年、歌人としても比牟呂八号より、初めて“志都児”の雅号を用いている。

志都児にとってこの年は出征という大事があり、またそれによる病など、人生においても苦しい時代であったと思われるが、出征時や出征中などには、赤彦や左千夫などから書簡が届き、病を得て病院へ収容され、帰郷した後も病や近況を心配する書簡が幾度となく届いている。おそらくこれらの書簡が、志都児の苦境を大きく支えていたのではないかと考えられる。

歌会に関する書簡は、まず同年十月二十五日付のもので、赤彦から森山藤一（汀川）に宛てた葉書が挙げられる。これは直接には志都児と関係はしないものの、次のようなことが記述されている。

御手紙拜見仕り候小生近作一向に無之御恥かしく存じ候伊藤左千夫氏此の内に來遊のよしついてわ盛につばな會員の會員仕り度右につき一人一圓づゝ會費として御差出し相願度右わ先生の旅費の幾分と會合の會費全體お支辦せんとするものに候右御承諾の上小生迄御届け被下度候 十月廿五日

これを見ると、つばな短歌会が主催で左千夫を迎え、歌会を行うので会員方から一人一



企画展

「歌人篠原志都児—その生涯と交友—」
初日の様子。興味深く見学する来館者。

円を集める。この中から左千夫の旅費と歌会の諸経費を捻出したいとの連絡事項が記されている。

その後、同年十一月十三日付で赤彦は志都児宛に、次のような封書を出している。

左千夫君來遊の日が確定せずきまれば云つてやるから車ででも御出かけ被下度候

これは十月二十五日付の葉書にあり、左千夫を迎えて行われる歌会準備の進行状況を伝える内容と、この歌会への誘いである。

また十一月二十一日付で左千夫が志都児宛に、次のような葉書を出している。

少々都合わるく旅行あきらめたかどうしてもあきらめられない二十三日早朝出立甲州
へ一泊して二十五日頃御地へゆく萬ハ逢つてのこと草々

十一月二十一日

これは今回の歌会のための左千夫の旅程を、志都児に知らせた書簡だと思われる。このような遣り取りを経て行われた歌会の日程は次のようなものであった。

二十六日、布半にて左千夫をむかえ、つばな会主催の歌会が行われている。この時の志都児の作歌には次のような歌がある。

ぬは玉の夜刈もおえてやすにいねしその夜を雨降ると呼ぶ

人皆のうましと食する串柿を歯が痛むのに吾は食しえぬ

翌二十七日、赤彦と志都児、竹舟郎、柳之戸などの北山歌人が主となり親湯へのぼり宿泊している。この時左千夫は平福百穂に次のような葉書を出している。

信州蓼科のふもと親湯といふ處に候此家の兩端に二軒の客室あり湯ぬるく湧くこと瀧
の如しあたり山々にハ雪澤有之候

蓼科のふもとのみ湯にのぼりくるみちの長手に雪とこしけり

十一月二十八日

このような記述から左千夫は親湯で温泉を楽しみながら、歌を作っていた様子が伺える。その後二十九日、志都児は左千夫を自宅に招き、左千夫はそこで三泊した後帰京している。このように、左千夫を迎えての歌会はつつがなく行われ、後日志都児は左千夫から十二月四日付で、帰京を知らせる次のような葉書を受け取っている。

拜啓此度ハ千萬御厄介に相成御禮申上くる詞もなく候二日の夜ハ甲府に一宿致し三日
夜漸く歸宅致候宅の方にも幸何事無之候間御安心被下度兩親様へよろし御申上被下度
願上候敬具 十二月四日

またこれも志都児とは直接関係していないが、赤彦が武居正義に宛てた封書の中に

先日東京の根岸派和歌の先生伊藤左千夫氏來誦盛に和歌會お開きしました

と歌会の報告をする記述が見られる。

3. 明治三十八年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は二回。一回目は九月五日に行われたもので、長塚節を迎えての地蔵寺での歌会。二回目がその二日後に行われた、同氏を交えて布半で行われた歌会である。

この年の志都児は作歌に熱中し、多くの歌を残している。各短歌雑誌への発表歌年次別数を見ても三十八年を境に多くの歌を発表していることがわかるが、その中でも三十八年が最も多くの歌を発表している。また精力的にさまざまなところへ足を運び、十一月に横岳を登山し、十二月には甲府へ出かけその足で左千夫庵を訪れている。

一回目の歌会については、九月五日、長塚節を迎えての歌会である。これについては九月三日付の手紙で、赤彦から志都児に宛てたものに次のような葉書である。

拜啓其後御無申候譯無之候

長塚節氏明四日布半につき五日に歌會お開き六日に霧ヶ峯登山せんと存じ候間兎二角
五日に御來會被下度候也 九月三日

内容は長塚節を迎え五日の日に歌会を開くので、是非来なさいと志都児を誘っている。歌会の様子を馬酔木二巻五号にその様子が掲載されている。九月五日に地蔵寺において行われた歌会の出席は赤彦、汀川、胡桃沢勘内、志都児であり、長塚節を入れ五名である。この時の歌会のお題は秋の田、蜻蛉、残暑、朝草刈である。この時の志都児の作歌には次のような歌がある。

麻干せる庭をたひろみ左右舞の早けき大山蜻蛉

吾まなご病みしこの夏思ほへて名の哀れなる目にくらとんぼ

翌九月六日、赤彦の案内で長塚節、胡桃沢勘内の三人は霧ヶ峰へ登山している。

二回目の歌会は九月七日、布半において行われたものである。この歌会は長塚節が降雨のため、宿の布半で足止めとなってしまう、そこで行われた歌会である。出席者も汀川を除く一回目の歌会の出席者と同じである。この時の歌会のお題は秋の山、霧、灯、秋葉物である。この時の志都児の作歌は次のようなものであった。

魚あさり川ぞひ行けば石通草いまだゑまなくこゝだ垂れたり
萩山に刈居れば茜さし日は透りつゝ霧はれずけり

歌会后日の志都児宛て書簡の中には、歌会について触れたものはないが、志都児自身が竹舟郎に宛てた書簡に次のようなものがある。

七日に早朝出立と言ひ居りしも長塚氏も朝よりの降雨出立も出来ず今日一日は色々雑話に日をくらし候、夜は長塚氏と久保田君と滑稽的話をいたされ腹をより申候胡桃沢君と予との如きは生まれて口にない大々の笑をいたし候、今でも其の当時の話を思へば一人で吹き出し申候

またこの時のことを赤彦が後年『アララギ』第十二卷二号に掲載している。これらの内容からこの歌会が出席者は少なかったものの、後年まで心象に残る歌会であったことが推察できる。

4. 明治四十一年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は五回である。一回目は一月七日、北山の朴葉宅で行われた新年の歌会。二回目は一月二十五日、二十六日、布半で左千夫を迎えて行われた歌会。三回目は一月二十九日、左千夫と共に親湯に登り行われた歌会。四回目は五月十日、浅間千代の湯で左千夫を迎えて行われた麻葉会主催の歌会。五回目は十月十日、富士見油屋で左千夫、千櫻を迎えて行われた歌会である。

一回目、一月七日に北山の朴葉宅で行われた歌会にて、志都児は次のような歌を作っている。

大年の神を迎ふる秋津島大和の国は雲晴れにけり
百八の鐘のひゞきに天地の眠りは明けて年立ちにけり

ここに挙げた歌はほんの一部であるが、この歌会に関する書簡については、一月一五日

付で志都児が左千夫より受け取った葉書に次のようなものがある。

拜復歌會のはかきも拜見朴葉繪が出来ると見え候（中略）何しろ今月中ニハ迄度ゆく
から逢つてくはしく話し可申

どうやら志都児が、件の歌会時の葉書を左千夫に送った返信のようである。また、後日左千夫が会いに行くとの内容もあり、二回目の歌会への呼び水ともなっている。

二回目は一月二十五日、二十六日に布半において左千夫を迎えての歌会が行われている。この歌会に関する書簡については、一月二十三日付で志都児が赤彦より受け取った葉書に次のようなものがある。

二十二日夜

只今左翁より來書 明日來諏との事 廿五日の歌會大に賑ぐべく喜び入り候早く御出
掛下され度候

とあり、赤彦は二十二日の書簡より左千夫の諏訪到着の日時を聞き、その事を志都児に葉書で伝えている。当日の歌会は非常に賑わい、出席者は左千夫、赤彦、竹舟郎、梨村、唾水、汀川、志都児、山水、胡桃沢勘内の九人で行われている。翌日二十六日は梨村、竹舟郎が去り、河柳、黙坊が来て行われている。布半での歌会はここで終わり、二十七日より左千夫は志都児、黙坊とともに北山を訪れ志都児宅に一泊している。

三回目の歌会については一月二十九日、新潟にて左千夫、志都児、黙坊、柳之戸、竹舟郎の五人によって行われている。ここで志都児は次のような歌を作っている。

蓼科の出湯の谷間未遠く雪の御岳今日さやに見る
こゝにして見放る空に雲もなく秀つ根山天にきほへり

なお、この歌は現在親湯入り口に歌碑として残されている。

左千夫の親湯入りは二十八日のようで、一月二十八日付の葉書を親湯から堀内卓へ出し
ている。

啓二十四日上諏訪旅行二十五日諸同人歌會あり會者九人大ニ振へり胡桃澤子も來會望
月少病にて來らす小生も松本行き止めて此新湯に來れり寒氣猛烈閉口三十日歸京之つ
もり也

ここには二十五日の布半での歌会の様子と、親湯の気候、帰京の予定が書かれている。歌会后日、志都児は左千夫から二月五日付で、次のような葉書を受け取っている。

拜啓小生三十一日雨ニ濡て夜中歸宅致候大ニ風を引き二日許臥床致候諸君へも返書も
不出今日漸く手紙を書き申候天然痘も騒ぎ程ニハ無之候乍何時御厄介ニ相成御厚意奉
深謝候まつハ不取敢御禮まで草々 五月

これは帰京を知らせるとともに、厄介になったことへのお礼を述べる内容となっている。四回目の歌会は五月十日、浅間千代の湯で行われた歌会である。この歌会は左千夫が越後への旅の途中、諏訪へ立ち寄り、浅間までの旅程を志都児を伴い、浅間で宿泊した千代の湯でおこなわれている。左千夫の旅程については五月十三日付で左千夫が長塚節に宛てた書簡で知ることができる。

十二日朝浅間温泉を立つて茲へ來た茲ハ柏崎の北方二里の在てある何の爲に茲へ來かと問ふ勿れ説明するハ永いから畧す久保田方へ一夜とまる篠原森山來る九日に下スワの温泉で一酌し篠原を携へて浅間へ深更ニ着例の人々の外湯木かきた湯木も物になりさうだ終に三夜滞留した

また浅間の歌会の出席者は、五月十日付で藤真次郎に宛てた葉書の連盟を見ると、左千夫、望月光、円太、胡生とあることから少なくともこの四名は出席していたと考えられる。この時志都児は次のような歌を残している。

葎割の鳴きのさやけく野を見のはれゝゝし青葉とる頃
宵々に降り来る雨は桑葉はやもつむべく世は忙しも

歌会后日、志都児は左千夫から五月十七日付で次のような葉書を受け取っている。

果実ハ大に失敬した浅間の三日愉快であつた越後の四日ハ暫く濛氣に任せるいつれほとゝきすの一月号あたりへ小説として現はるへし越後ニ而ハ歌も作つた十六日敦賀へ宿る信州より越後の方雪が多い越後より越中ハ更に多い有名なる立山満山の白雪若葉の上になき渡つて實に莊觀を極めてゐた十七日朝より大雨且つ風敦賀に居られないから京都へきたいつ見ても感じよきハ京都である風も止んだのかないのか穩かある今夜ハ漸く落ちつきて寝られる不宣

これにより左千夫は浅間から越後へ、その後敦賀に泊まり京都へと旅を続けていることがわかる。

五回目の歌会は十月十日、富士見油屋において、左千夫、千櫨を迎えて行われている。この歌会に先立ち、志都児は左千夫から九月十三日付で次のような葉書を受け取っている。

其後消息なく如何致候や近頃不順ニ寒く御地の候氣作物ニ害なく候や富士見高原ハどうしても見たいから十月ニなつた出かけようかと考へて居候

この時点ではまだ日程は決まっていはいないものの、十月には富士見へ行きたいと考えていることを伝えている。また志都児は赤彦から九月二十二日付で次のような葉書を受け取っている。

盆忙シイダラウ

此間ノ子規忌ハ不二見會ヨリモ面白カツタ 眞面目ナ話デ持切ツタ 歌モ少シハ物ニナル者ガアル二三日中ニ送ル君ノヲモヒアラバ見セロ
何日ニ蠶ハヒキル ヒキタラスグ遊ビニ來イ左翁ノ會誦ヲ機トシテ不二見デ比牟呂誌友會ヲ開カント思フ 誰モ彼モ一度ハ面談シタガヨカラウト思ツテ考付イタ 甲州ヘモ言ツテヤル 僕ハ今比較的ヒマダ 九月廿二日

ここで赤彦は左千夫の富士見訪問を機に、比牟呂誌主催で歌会を開きたいとの考えを志都児に伝えている。しかしこの時点でもまだ左千夫来訪の日程は決まっていと見受けられる。その後志都児は再び左千夫から九月三十日付で次のような書簡を受け取っている。

拜啓秋氣心持よく相成候富士見高原之會ハ頗る仰山ニ相成候様ニ候小生も諸君に逢はるゝ樂みを今より想像致居候それにつき君に少々無心願上候甚申兼候へともいつか君より所望ありし不折之画幅ハ蕨桐軒ニやる心組之處いつまで立ても茶室も出來不申聊か馬鹿々々しく相成候間あれを進呈可致候間表装代として十円許り御送金被下度頼入申候それにて小生は旅費を辨し候つもりニ候兒共多く持ち候小生にハ何分家族の手前もあり本年も水害など有之候次第故牛乳の方の金を以て旅行するは甚だ心苦き事情有之候何卒此邊御推諒被下前項之件願上候書は其日に持參可致候それに就ハ君より小生へはかきにて「金を少し送りたいればそれにて是非諏訪まで来てくれ云々」と書いて□し被下度くれゝも願上候萬ハ拜顔可申上甚だ汗背之義なれとも幾重にもご依頼申上候敬具

九月三十日夜

左 生

志都児様

これによると志都児は富士見の歌会をととても楽しみにしているが、左千夫は子沢山の上、今年の水害もあり、自費で旅をするのが厳しいとの事情を話している。そこで左千夫は志都児に、以前志都児が欲しがっていた中村不折の画を譲るので、その表装代として十円ばかりを用立ててほしいと頼み、そのお金を富士見までの旅費としたい旨を伝えている。

歌会三日前、志都児は赤彦に次のような葉書を貰っている。

父公如何氣に懸ル

今日左翁より來信 九日出發その夜不二見に泊ると申來れり

依て小生は九日午後二時半頃上スワ發の氣車で不二見に行くべし 君ハ八日小生宅一泊明日共に行くを最上とし 九日小生ノ汽車ト供に茅野カラ乗ルワ中等トス、ソレヨリ後ルカハ下等也

十月六日夜認ム

これにより歌会の日程が決まったことが伝えられている。この歌会で志都児が作った歌は次のような歌がある。

力士がかちのほこりに大手ふり詰めぐりすと土はらゝかす

また、歌会の様子は左千夫がそれぞれ寺田憲、長塚節、胡桃沢勘内に宛てた葉書より見ることができる。まず十月十日付で寺田憲に宛てた葉書に、

拜啓昨日當地へ参り候高原晩秋之草花只神さびて俗界を去る幾千里の感致候利根川の表紙一昨日不折訪問致候處不在にて會見を得さりしも老母君へ懇ろに頼み置候間四五日の中に御送附可申上候右御報まで早カ 十月十日

とあり、十月十三日付で長塚節に宛てた葉書をみると、

又蓼科山にきた。茲に埋骨の地を得んとするの念起る。やがて此希望を確定して而して供邊を散歩すれば愉快の情更に深い、秋草は全く影を絶ち紅葉が盛りである。富士見の歌會は會者十六人、非常に盛であつた。茲は猶滿地の秋草娟を競ふてる。三ヶ月湖へはどうしようかと迷ふてる。十七日頃までには是非歸京せねばならない。君は必ず文章があるであらう。携て出京せよ。此行古泉君同行である。

と書かれており、同日付で胡桃沢勘内に宛てた葉書には、

啓富士見歌會ハ頗る盛なりしこれは望月君が話すなるへし十一日上スワに宿り十二日
久保田篠原古泉と四人新湯ニ登る十三日ハ古泉と僕と残る蓼科に埋骨の地を得たしの
念頻に起る十坪の地と方丈の假庵を結び吾か餘生をこゝに籠りたい余り老人しみたと
笑ふ勿れ青年時代に戀の奴となる事ある心事と同状なるへし不宣 十三日

とあることから左千夫は、十月九日に富士見油屋に到着し、十日歌会が行われ、出席
者は十六人と大変盛況であったことが分かる。翌日十一日は上諏訪に一泊し十二日に親湯
に登っている。

歌会后日、十月十九日付で志都児は左千夫の帰宅を知らせる次のような書簡を受け取っ
ている。

啓小生十七日歸宅致し候貴書も昨日拜見致候諸君を失望させ候事誠に残念ニ存候古泉
君と彼日湯川橋上ニ別れ小泉ハ直ニ茅野に向つて馳せ去り小生ハ貴宅へ寄候處どなた
も居らぬ故カバンと傘を障子の内へ入れ置き雪人許りたつね候處これ又留守にて本家
の雪人君の御親父なる人と暫く話しそれより湯川へ引返し橋本にて晝食など致候橋本
にても席もない有様と聞き一旦山中湖行ハ呆めたるも天氣よろしき故茲に俄に山中湖
行を決心致し候再度貴家を訪問してカバン等を持出し（尤も若い女か居た其人の云は
く近頃参りました故皆の往つて家か判りませんから云々僕は君の○君にあらずやと
思つた怒り給ふな）それから大急ぎで茅野へ出ると三分許りの差で失敗がつかりして
茅野停車場の前へ宿つて了ひ候君の家へ上つて寝轉てゝも居ればよかつたと後悔して
も間合はない（中略）山中湖へ行かれないならば今一夜君と話せばよかつた何でも氣
揉するとまごつくものと存候乍何時君の厚意はしにじみと嬉しい君などゝ小生の關係
は歳月の關係てはない一生を通して猶後世に至るまでの關係に候目前の小利害心に囚
はれて一年や半年の間に相敵視する様な無節操事ハ小生らは生まれかはつても嫌に候
小生は一人東京に居つても信州に眞に同人が澤山あると思へは少しも淋しくは無之候

これは帰京の挨拶とともに、湯川で小泉千樫と別れた後の顛末が書かれている。また志
都児や北山同人との友誼に触れ、北山同人との精神的な繋がりを非常に尊いものと感じて
いたことが伺える。これらの経緯を見ていくと富士見での歌会は非常に多くの出席者がお
り、盛況であったと同時に左千夫自身が蓼科を終の棲家として考え始めるなど、心情的に
も思うところの多い歌会であったと考えられる。

おわりに

今回取り上げた歌会は大規模なものが主であり、小規模なものや書簡に多くの記録がないものは割愛した。これらを通して見ていくと歌会の発端から経緯を経て、当日の様子から後日談までの営みがひとつの流れとして実感できるのではないかと思われる。また書簡を追うことで差出人の文面から直に臨場感が感じられるものである。

また今回は主に書簡から歌会の様子を探っていったが、ここへ『馬酔木』や『比牟呂』などの記述を加味することにより、さらに充実した考察も可能であるとも考えられる。このような課題も残したが、これで歌会の考察も終わることとする。

【参考・引用文献】

『寂寥』 1989年 篠原圓平編

『左千夫全集 第九巻』 1977年 伊藤左千夫著 岩波書店

『赤彦全集 第8巻』 1930年 久保田俊彦 岩波書店

『島木赤彦と篠原志都児』 1976年 馬詰嘉吉著 淵上祐史

『航跡』 1971年 篠原亮逸著

『歌人篠原志都児—その生涯と交友』 2001年 茅野市八ヶ岳総合博物館
八ヶ岳麓文芸館

篠原志都児家所蔵書簡目録

氏名	年	明治														大正		
		35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7
篠原志都児	封書			31			3	2										7月19日没
	ハガキ			1			2	1										
両角福	封書					1												
	ハガキ	不祥 2																
両角竹舟郎	封書			2	5	4	3	2										
	ハガキ				1			2										
柳沢黙坊	封書	不祥 4		3			7	1									3	2
	ハガキ																1	
蔵真一郎	封書												1					
	ハガキ						8	7	1	8	1	1						
胡桃沢勘内	封書												1	1				
	ハガキ				1	3	8	9	11	12	8	11						
堀内卓	封書						1		1	1	10月19日没							
	ハガキ						1	8	4									
望月光	封書	不明 2				1	1				10月19日没							
	ハガキ				1	5	3	12	8	2	2							
古泉千樫	封書												1	1				
	ハガキ																	
平福百穂	封書												1					
	ハガキ									3	1	2	2					

博物館活用指定学級（遊学教室）について

正木美香*

当博物館は、昭和63年10月25日に開館し、平成2年より博物館活用指定学級事業を行っている。

博物館活用指定学級（通称「遊学教室」）は、市内小中学校のクラスごとに半日の日程で博物館に来館していただき、体験学習などを行う事業である。

市内に小学校は9校、中学校は4校であるが、現在までに遊学教室を利用した中学校は無い。

市内13校に4月当初博物館の担当者の先生を選出していただき、年に3回会議を開き、博物館と学校の連携事業の橋渡しを行っていただく（以下、学校担当者会議）。その中で、博物館活用指定学級の希望を取り、年間の予定を立てる。

学校から博物館までの交通手段は、市の所有するマイクロバスを使っていたが、現在は、同じく市の所有するスクールバスを使い送迎している。また、これにかかる費用は市が負担している。

学校担当者会議において、各学校から、博物館の考えるメニュー以外に新しいアイデアを求め、実現していくものもあったが、半日という時間制約の中、実現に至らないものもある。

なお、平成12年の尖石縄文考古館の開館に伴い、遺跡の発掘体験や、土器作りなど、考古学にかかわるものは、会場、講師ともに尖石縄文考古館で行うことにした。

また、遊学教室を希望する学級が増える中、各学校なるべく一学年を受け入れるよう計画をするため、すべての希望の受け入れには至っていない。これを受け、学校への出前講座の要望も出始めているが、これも実現には至っていない。

遊学教室を行う中で当初より開催しているのは「天草からとろてん」である。

茅野市は角寒天の出荷量全国一位を誇る。まさに代表的地場産業である。博物館にある寒天作りの道具の見学を含め、海草を煮出し、とろてんを作るものである。

遊学教室の前後に、学校によっては寒天工場の見学に行き、事前学習を行い、博物館で作ったとろてんを持ち帰り寒天を作ってみるところもある。

地場産業とはいえ、とろてんを食べたことの無い児童もいるため、遊学教室が、地域を知る上で、ひとつのきっかけになっているのではないかと思われる。

参加した学級からは概ね好評をいただいております、総合的学習の時間などにも利用できるよう、さらに学校と連携を図りたいと考えるものである。

*八ヶ岳総合博物館学芸員

天体観測室を利用しての活動

大谷 勝己*

☆星空観望会

月1回、主に新月のない金曜日に開催してきました。6・9月は天候不順のため中止、また8・11月も開催はしたものの、曇天で大型望遠鏡をのぞくことはできませんでした。3月には池谷・張彗星が接近し、特別観望会を開催しました。

4月27日 土星 木星 月 春の星雲・星団

5月25日 春の星雲・星団

7月27日 月面の観察

8月11日 ビデオ鑑賞

10月12日 秋の星雲・星団

11月9日 ビデオ鑑賞

12月14日 冬の星雲・星団

1月11日 スターウォッチング

2月8日 講演会と観望会

3月8日 池谷・張彗星

3月20日・21日 池谷・張彗星の特別観望会、土星食



星空観望会の様子

☆講演会の開催

講演会は、平成9年度(1998年)から始まりました。北部生涯学習センターのやつがねホールを会場とし、この年は、3月21日に「彗星観測の楽しみ」と題して、松本市在住の彗星観測者の永井佳実さんにテンペルタットル彗星などのお話を頂きました。平成11年(1999年)には、日本流星研究会写真観測部門幹事 日本火球ネットワーク事務局の下田力さん(朝日村在住)に「流星の話(しし群)」のお話を3月21日にいただきました。

翌平成12年(2000年)2月24日には、長野高専の物理を担当している、大西浩次さんに、重力レンズのお話をいただきました。大西さんからは、理論的に重力レンズ効果を観測して、相対論的效果を検出したり、重力レンズによる増光現象(マイクロレンズ)を使ったダークマターの研究についてや、1999年8月に、マイクロレンズ探しにニュージーランドの天文台に観測にいらしたお話などを、天体写真を含めて講演していただきました。

平成12年度は2月24日に、総合研究大学大学院博士過程に所属し東京都三鷹市在住の阿部新助さんから、私の専用としている、「流星、彗星」「太陽系外惑星」「地球外知的生

*尖石縄文考古館主任(八ヶ岳総合博物館兼務)



大西浩次さん



阿部新助さん

命」などのお話をいただきました。とくに、流星痕の研究のご専門の話題、そして LEONIDMAC という国際プロジェクトに2人の日本人の研究者の1人として観測飛行機に搭乗し、1999年のしし座流星群の流星雨をご自分の目でみてきたお話とその映像は圧巻でした。なお、この映像はNHKで放送されたものでした。

平成13年度(2002年)も、文部科学省・宇宙科学研究所 惑星研究系 COE 研究員となって神奈川県相模原市の宇宙科学研究所に勤務となった阿部新助さんに「しし座流星雨」と題し、2月8日に講演いただきました。阿部さんは流星や彗星、小惑星などの太陽系小天体の観測的研究を専門としていて、主に、今年11月末打ち上げ予定の MUSES-C 小惑星探査機の搭載機器開発の研究についてお話いただきました。



阿部さんの講演の様子(平成14年2月8日)

☆天文友の会

月に3回ほどの活動日を予定し、大型天体望遠鏡の操作研修や天体観測を続けてきました。天候不順の日も多く、予定された活動は思うように進みませんでした。13年度には、皆既日食のインターネット中継を見たり、8月16日の木星食の観測や3月に極大となった池谷・張彗星の撮影などを行うこともできました。



6月21日 皆既日食のインターネット中継



8月16日 木星食観測



3月9日午後7時30分ころ 池谷・張彗星の撮影

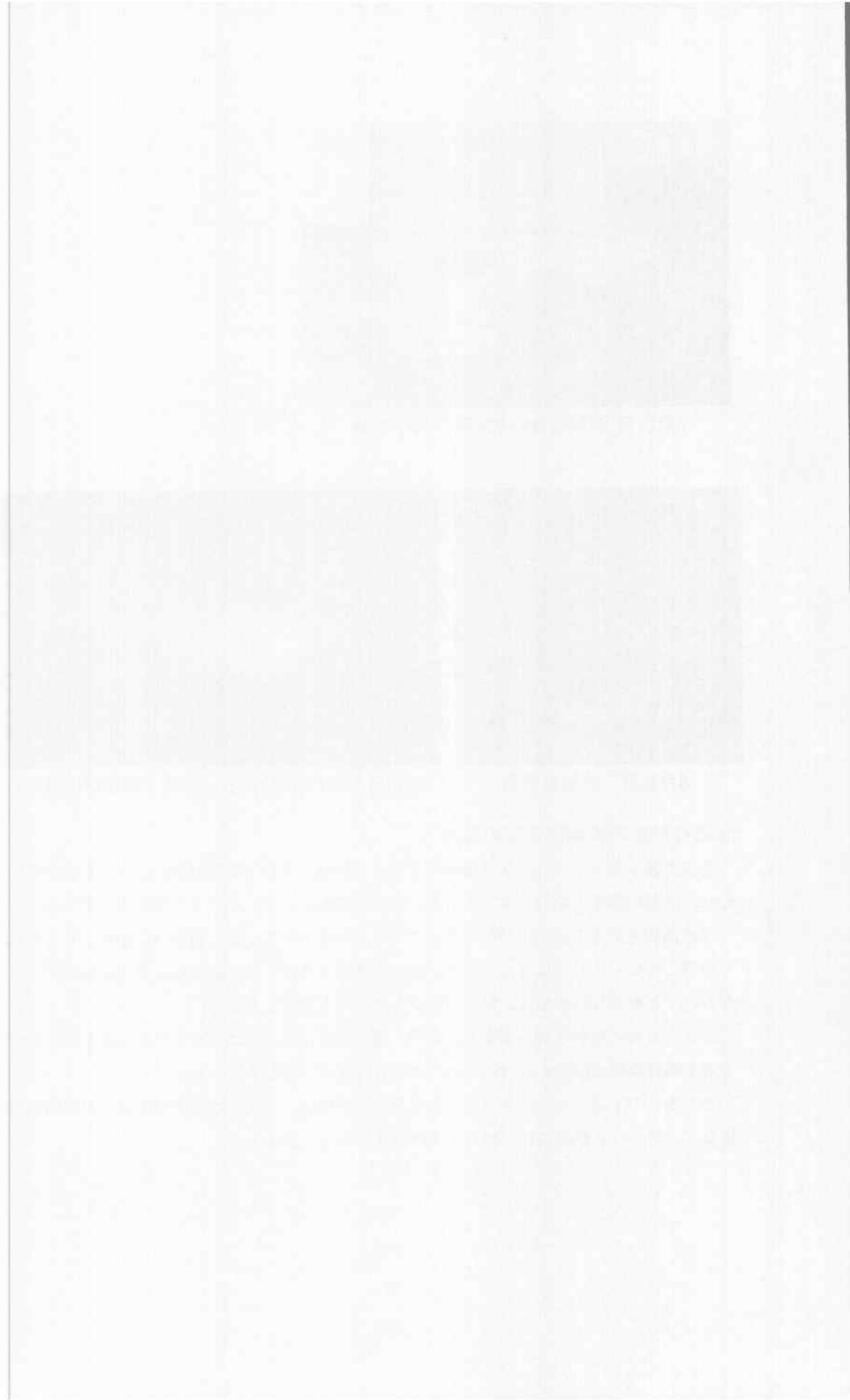
☆これからの天体観測室の活用

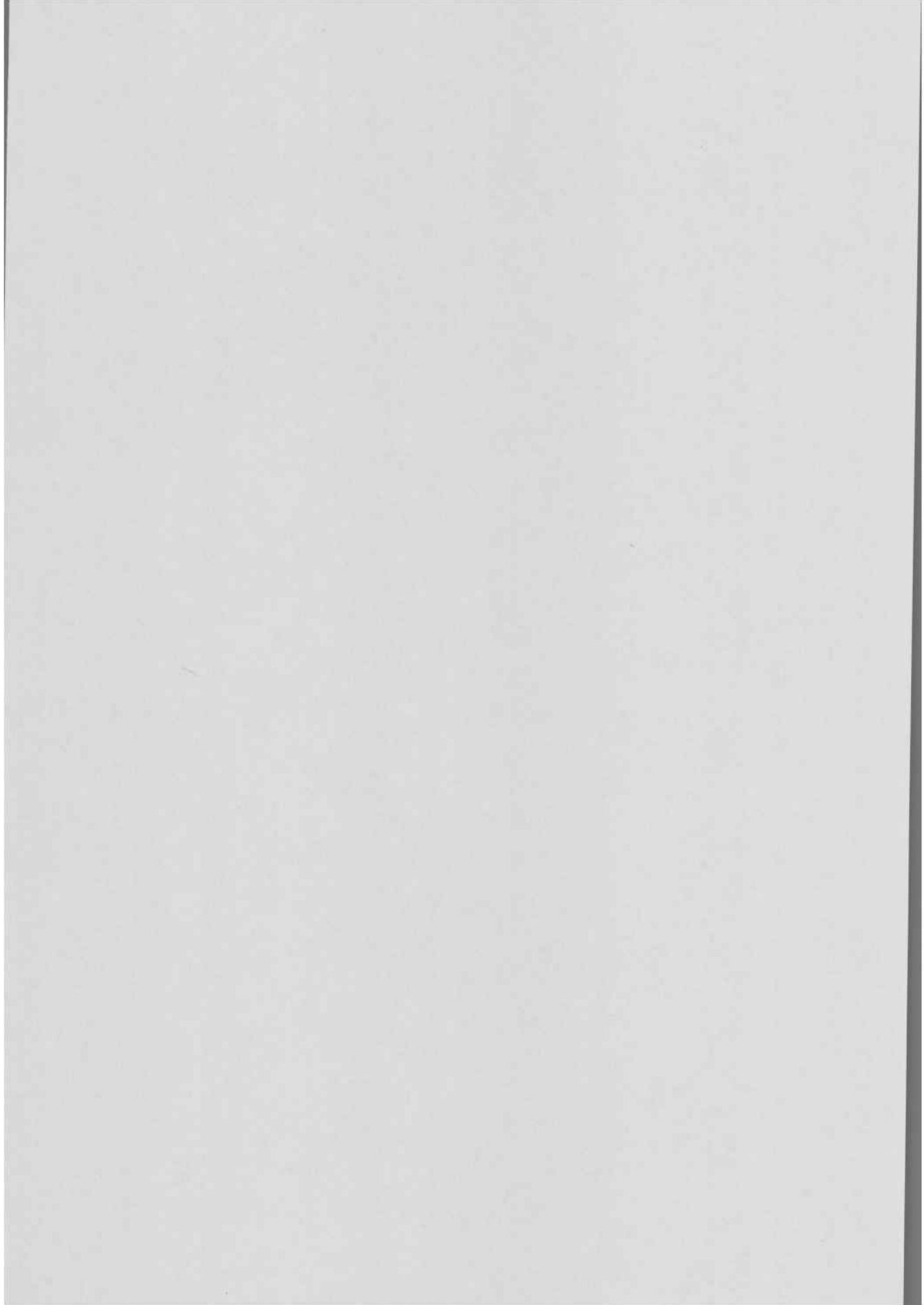
北部生涯学習センターの天体観測室を使って活動している星空観望会と天文友の会を中心に、活動の様子を紹介してきました。今後の課題として、次のようなことがあります。

天体観測室のある北部中学校の生徒であっても在学中に1度も観望会に参加することなく卒業していくものがほとんどです。夜の事業のために、送り迎えなどを中心に小中学生などの子どもたちの参加は、保護者の協力がないと実現しません。

また、天候に左右される事業で、雨天・曇天時には、公開はできません。そして、その管理や職員体制の問題から計画された公開日以外の公開もできません。

より多くの子どもたちの星空の面白さを伝えるには、学校との連携や市民との協働の発展など、さらなる活用には一層の工夫が必要となってきます。







平成13年度茅野市八ヶ岳総合博物館事業報告

1. 平成13年度実施事業

(1) 八ヶ岳麓文芸館の展示替え

期間 2月1日(金)～9月29日(土)

八ヶ岳麓文芸にゆかりのある短歌・俳句・小説等展示

(2) 企画展

①写真展 「子リスの物語り」

7月28日(土)～8月26日(日)

入館者 2,094名

日本写真作家協会会員 加藤 静氏

・オープニングトーク

7月28日(土)

加藤静氏による茅野市の自然や写真撮影の苦労話など体験談

②文芸館開館一周年記念企画展「歌人 篠原志都児～その生涯と交友～」

10月13日(土)～1月13日(日) 入館者 2,290名

北山生まれの“篠原志都児”は伊藤左千夫、島木赤彦等と親交が深く、
文芸への目覚めから歌への情熱と交友を展示

・オープニングトーク 10月13日(土)「志都児を語る」篠原圓平氏

・企画展記念講演 12月1日(土)「岳麓文芸の勃興と篠原志都児」北澤敏郎氏

③研究・創意工夫展 (市内小中学校 夏休み理科研究絵画、工作展)

10月21日(日)～11月25日(日) 入館者 1,541名

参加校 小学校9校、中学校2校 出品数220点(出品者265名)

工作・絵画の部、研究の部の2部門に分かれて各茅野市長賞、教育委員会賞、博物館長賞、審査員特別賞を授与

(3) ふるさと講座

①金鶏金山を歩く (つるし堀、堤址、天保石塔)

6月18日(日) 講師：北原 昭 参加者27名

②北八ヶ岳横岳めぐり (湖沼、植物、火山、野鳥)

7月20日(日) 講師：植松博視 参加者11名

③諏訪大社史跡めぐり (上社周辺)

9月23日(日) 講師:立石喜信 参加者12名

④伝統地場産業の見学 (両角仏壇工場)

1月27日(日) 講師:両角匠一 参加者6名

(4) 博物館活用指定学級 21学級 601名参加

「遊学教室」一市内小学校の1学年を対象に博物館や現地に来てもらい、半日の日程で体験学習を行う。

5月25日(金)	北山小学校	6年1部	32名
	「土器作り」	講師:竹村 哲(考古館職員)	
6月13日(水)	金沢小学校	6学年	29名
	「土器作り」	講師:功刀 司(考古館学芸員)	
7月4日(水)	金沢小学校	2学年	28名
	「牛乳パックで紙すき」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
7月5日(木)	米沢小学校	2学年	43名
	「牛乳パックで紙すき」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
7月10日(火)	湖東小学校	6学年	41名
	「土器作り」	講師:功刀 司(考古館学芸員)	
10月5日(金)	豊平小学校	2年1部	39名
	「豆腐作り」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
11月14日(水)	北山小学校	2年1部	28名
	「豆腐作り」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
11月16日(金)	玉川小学校	2年2部	31名
	「豆腐作り」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
11月21日(水)	玉川小学校	2年1部	31名
	「豆腐作り」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
11月22日(木)	玉川小学校	2年4部	31名
	「豆腐作り」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
12月12日(水)	北山小学校	3年1部	31名
	「天草からところてん」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
12月13日(木)	泉野小学校	2学年	28名
	「天草からところてん」	講師:正木美香(博物館学芸員)	
1月9日(水)	宮川小学校	3年1部	33名
	「天草からところてん」	講師:正木美香(博物館学芸員)	

1月10日 (木)	豊平小学校	3 学年	41名
	「天草からところてん」	講師：正木美香 (博物館学芸員)	
1月17日 (水)	宮川小学校	3 年 2 部	36名
	「天草からところてん」	講師：笠原郁子 (博物館学芸員)	
1月18日 (木)	宮川小学校	3 年 3 部	36名
	「天草からところてん」	講師：笠原郁子 (博物館学芸員)	
1月23日 (水)	米沢小学校	3 学年	48名
	「天草からところてん」	講師：正木美香 (博物館学芸員)	
1月24日 (木)	金沢小学校	5 学年	15名
	「天草からところてん」	講師：正木美香 (博物館学芸員)	

(5) 博物館小講演会

①ふる里山浦探訪

5月13日 (日) 講師：湯田坂正一 (博物館協議会委員) 参加者28名

②ホテルの生態と繁殖について

6月3日 (日) 講師：小林比佐雄 (塩尻市蝶の博物館) 参加者23名

③21世紀の森林と人間のかかわりについて

6月17日 (日) 講師：小池正雄 (信州大学教授) 参加者19名

④農業用水と坂本養川

10月14日 (日) 講師：浅川清栄 (諏訪市文化財専門審議会委員長) 参加者19名

⑤風土と文芸

2月10日 (日) 講師：島田紀孝 (岳風会東支部長) 参加者42名

(6) 博物館ボランティア活動 参加者86名

①博物館ボランティア講座の開催

各専門分野に別れて学習を行い、実践的にボランティア活動を行う。

- ・開講式 5月13日
- ・小講演会の聴講 5月13日、6月3日、6月17日、10月14日、2月10日
- ・ふるさと講座への参加 6月24日、7月20日、9月23日、1月27日
- ・閉講式 3月17日

②ボランティア活動

- ・遊学教室手伝い
- ・ロビー体験学習手伝い
- ・修学旅行対象体験学習の手伝い (盛夏期)

- ・天文友の会（星）月3回 講師：大谷勝己（尖石縄文考古館主任）
北部生涯学習センター天文台の取り扱いの研修及び星観測を実施
- ・探鳥会（バードウォッチング） 講師：両角英晴（博物館ボランティア）
 - 5月3日（木） キツツキの森を訪ねて 悪天候のため中止
 - 12月23日（日） 冬の野鳥（守矢史料館周辺）
 - 2月9日（土） 冬の水鳥（岡谷市横川河口）
- ・語りべの活動
- ・はたおりの活動

(7) ロビー体験コーナー 参加者124名

- | | | |
|-----------|------------|--------------------|
| 5月20日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 6月 3日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 6月17日（日） | 拓本とり | 指導：篠原敬博（博物館協議会役員長） |
| 7月 1日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 7月15日（日） | シャボン玉 | 指導：小池春夫（博物館長） |
| 9月 2日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 9月 9日（日） | ペットボトルロケット | 指導：小池春夫（博物館長） |
| 9月30日（日） | 組木づくり | 指導：両角源美（茅野市教育長） |
| 10月 7日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 10月28日（日） | つる細工 | 指導：篠原伊津子（茅野市北山） |
| 11月11日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 12月 2日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 12月 9日（日） | 小鳥の餌台づくり | 指導：小池春夫（博物館長） |
| 12月23日（日） | しめ飾り作り | 指導：平沢忠由（茅野市泉野） |
| 1月20日（日） | 小鳥の巣箱づくり | 指導：小池春夫（博物館長） |
| 2月 3日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |
| 2月17日（日） | 藁ぞうり作り | 指導：渡辺正晴（茅野市米沢） |
| 3月 3日（日） | はたおり | 指導：山崎亮子（博物館ボランティア） |

(8) 観望会

- 北部生涯学習センターで実施 講師：大谷勝己（尖石縄文考古館主任）
- 4月27日（金） 土星、木星、月
 - 5月25日（金） 悪天候のため中止
 - 6月22日（金） 悪天候のため中止

- 7月27日（金） 月面の観察
- 8月11日（土） ビデオ鑑賞
- 9月14日（金） 悪天候のため中止
- 10月12日（金） 秋の星雲
- 11月 9日（金） ビデオ鑑賞
- 12月14日（金） 冬の星雲・星団
- 1月11日（金） スターウォッチング
- 2月8日（金） 講演会「しし座流星雨」

講師：阿部新助（宇宙科学研究所）観望会は悪天候のため中止

(9) 各種事業

- ①博物館・文化財課だより「八ヶ岳通信」第20号発行
- ②子供放送局の受信
- ③博物館学習会員 386名（大人319名 子供67名）
- ④ロビー体験発表展 3月10日（日）～3月28日（木）

2. 常設展示内容の概要

(1) 自然

茅野市域は、フォッサマグナの西縁にあたり、中央構造線の斜交する位置にあります。また、八ヶ岳火山列、守屋山、諏訪盆地など、地質学上複雑な大地を形成しています。この変化に富んだ大地と、中部高地の特異な気象条件が、わが国でも屈指の豊かな動植物相を育ててきました。

こうした恵まれた自然環境は、人々の生活基盤となり、独自の文化を形成し、未来への創造力を生み出す源となっています。

ここでは、茅野の大地、豊かな水、八ヶ岳の生物を模型・ジオラマにより統括的に理解できるように展示するとともに、実物やグラフィック等による系統的展示を組み合わせ、楽しみながら理解することができます。

(2) 歴史

広大な八ヶ岳山麓に展開された目をみはるような縄文文化の隆盛から、人々が生きていく部隊としての山麓集落を形成した汐の開削と新田開発にいたるまでを、実物やグラフィックによって展示し、山麓の歴史を探ります。

(3) 産業と民俗

標高1,000m前後の厳しく寒い冬、冷涼で気温の低い夏、水の少ないやせた火山灰地の厳しい自然環境に耐えてきた人々の、生きていく知恵を、なりわいやくらしの道具、民家の復元、グラフィック、映像などで展示をし、体験的に理解できるようにしてあります。

(4) 八ヶ嶽岳麓文芸館

平成12年度にオープンし、郷土に関わる今昔の歌人、俳人、文人達の作品、資料を展示し、岳麓の文芸を紹介している。

(5) 展示・収蔵資料点数

	自然科学資料			人文科学資料					文芸関係資料	合計
	地学	陸水	動・植物	考古	歴史	産業	民俗	未来		
展示資料	124	157	1,046	312	35	169	545	8	297	2,693
収蔵資料	4		303		89		7,223	1	73	7,693
合計	128	157	1,349	312	124	169	7,768	9	370	10,386

博物館協議会委員名簿

<平成13年度・14年度>

丸 茂 伊 一
小 平 昌 寿
飯 田 美智子
長 田 豊 彦
小 平 邦 雄
土 橋 正 子
井 原 栄 子
篠 原 敬 博
湯田坂 正 一
今 井 文 明
原 洋 司

八ヶ岳総合博物館専門委員名簿

<平成13年度・14年度>

自 然 (動物) 下 山 良 平
自 然 (陸水) 浜 篤
自 然 (植物) 植 松 博 視 (平成13年度のみ)
自 然 (天文) 今 井 文 明
自 然 (天文) 畑 英 利
人 文 (歴史) 細 田 貴 助
人 文 (民俗) 牛 山 市 弥
人 文 (歴史) 中 村 昭
人 文 (民俗) 牛 山 圭 吾
人 文 (文芸) 伊 東 一 夫
人 文 (文芸) 北 澤 敏 郎
人 文 (文芸) 篠 原 圓 平
人 文 (文芸) 原 充
人 文 (文芸) 北 澤 平 八 郎

博物館職員名簿

<平成13年度>

館	長	小池春夫	(甄託)
係	長	五味正幸	
主	任	大谷勝己	(観望会担当・尖石縄文考古館兼務)
学	芸員	正木美香	(神長官守矢史料館兼務)
学	芸員	笠原郁子	
臨	時職員	萩原儀久	(文芸館担当)
臨	時職員	小堀幸恵	
臨	時職員	長田ひろ子	
東急コミュニティー		林克則	(施設管理)

紀 要 第 10 号 2002年3月31日

編集発行 茅野市八ヶ岳総合博物館
〒391-0213 長野県茅野市豊平6983番地
TEL 0266 (73) 0300
FAX 0266 (72) 6119

